相模原殺傷事件判決

作家、詩人 辺見庸さんに聞く

隠された優生思想の表出

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が、元職員の植松聖被告に死刑判決を言い渡した。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

辺見庸さん

へんみ・よう　1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼（め）の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「純粋な幸福」など著書多数。

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所は死刑判決を下しました。その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明しました。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」＝2016年、相模原市緑区

「月」の表紙

「月」　寓意に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。

物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありきたりの〈善意〉」から発する「おさだまりの文言〈オキノドクニ…〉」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。

「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれよりもそっちょく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「〈敵対者〉の空気」をまとってやって来る。

死刑判決は被告と同じ論理に

■偽装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

■本音

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳（しゅんげん）さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

文化

角川俳句・短歌賞の贈呈式

同時受賞4人に期待

俳壇、歌壇の登竜門、第65回角川俳句賞・短歌賞（角川文化振興財団主催）の贈呈式が東京で開かれた。いずれも2人同時受賞という珍しい結果に、選考委員からは「若いリーダーとして俳句を活性化してほしい」「さらに研さんを積んで良い歌を」と期待する声が聞かれた。

俳句賞を受賞したのは、西村麒麟（きりん）さんと抜井諒一さん。西村さんは〈唐辛子ばかりの鍋の見えにけり〉など、確かな描写力で対象をくっきりと詠み上げ、一方の抜井さんは〈遠蛙ときをりすぐそこの蛙〉など、さりげなく奥行きのある世界を描いた。

選考委員の小澤實さんは西村さんの句を「俳諧性のある作品」、抜井さんの句を「季語の空気感をよく捉えている」と評し「全く違う世界を持っている」と同時受賞を喜んだ。西村さんは「20歳の頃に結社に入門して約15年。ただただ楽しかった」と感謝し、抜井さん。西村さんは〈陽のあたるクレーンのよこで飯食えば雲雀が空を押し上げている〉など、工事現場の歌をさわやかな気風で詠んだ。〈心臓は鉱物に置きかわるべし雪の夜ふかく呼吸するとき〉と歌った鍋島さんは、予想外な言葉の連なりから独自の世界を紡いだ。

第65回角川俳句賞・短歌賞の贈呈式で壇上に並んだ受賞者ら。前列右から２人目が抜井諒一さん、左へ順に西村麒麟さん、田中道孝さん、鍋島恵子さん＝東京都千代田区

選考委員の小池光さんは田中さんの歌について「職業詠はつらさを歌うのが基本トーンだったが、泣き言がなくて気持ちのいい雰囲気が漂うのが新鮮だった」。鍋島さんの歌は「先に言葉があり、組み合わせていくうちに現実が現れる。抽象的思考がよく形象化されている」と評価した。

田中さんは「短歌の一瞬の中に自分の生活が出ればいいと思っている」と話し、鍋島さんは「結社に所属せずに作ってきた。歌会などに参加すれば、まだ伸びしろがあるのではないかと思う」と語った。

田中さんは「俳句という切符を使って旅するうちに、さまざまな人たちと出会い、素晴らしい自然から感動をもらった」と語った。

短歌賞を受賞したのは、田中道孝さんと鍋島恵子さん。田中さんは〈ラブレターのように飯食えば雲雀が空を押し上げている〉など、工事現場の歌をさわやかな気風で詠んだ。〈心臓は鉱物に置きかわるべし雪の夜ふかく呼吸するとき〉と歌った鍋島さんは、予想外な言葉の連なりから独自の世界を紡いだ。

選考委員の小池光さんは田中さんの歌について「職業詠はつらさを歌うのが基本トーンだったが、泣き言がなくて気持ちのいい雰囲気が漂うのが新鮮だった」。鍋島さんの歌は「先に言葉があり、組み合わせていくうちに現実が現れる。抽象的思考がよく形象化されている」と評価した。

田中さんは「短歌の一瞬の中に自分の生活が出ればいいと思っている」と話し、鍋島さんは「結社に所属せずに作ってきた。歌会などに参加すれば、まだ伸びしろがあるのではないかと思う」と語った。

京都国際写真祭

春から秋へ延期

京都市内の町家などを舞台にした「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」は、新型コロナウイルスへの対応のため、開催時期を春から秋へ延期する。当初は4月18日～5月17日の予定だったが、9月19日～10月18日に変更する。

国内外の気鋭の写真家らの作品の展示を中心としたイベントで、2013年にスタートし、今年で8回目。今回のテーマは「VISION（ビジョン）」で、日本人作家では、福島あつし、片山真理、植田正治らの作品が出展される。サイトは https://www.kyotographie.jp/